

食品安全委員会が収集したハザードに関する主な情報

○微生物・プリオン・自然毒—細菌

ドイツ連邦リスク評価研究所(BfR)、農業分野における抗生物質の使用が減少傾向にある旨を公表、欧州疾病予防管理センター(ECDC)は欧州における薬剤耐性及び抗菌性物質の消費に関する 2014 年調査データを公表**1. ドイツ連邦リスク評価研究所(BfR)、国際シンポジウムにおいて農業分野における抗生物質の使用が減少傾向にある旨を公表 (2015 年 11 月 2 日付け BfR 情報提供 No. 32/2015)。**

(1) BfR Hensel 長官は 11 月 2 日の「フードチェーンにおける薬剤耐性」国際シンポジウムにおいて、「我々の研究からフードチェーンにおける薬剤耐性菌はもはや増加傾向にはないという好ましい知見が得られ、ここ数年はマイナス傾向になった。食品中の薬剤耐性菌数が減少した理由の一つとして、農業分野における抗菌性物質の使用が減少していることが挙げられる。今後もこの好ましい傾向を維持し、更なる対策が重要である」と述べた。

BfR による最近の消費者モニタリングの結果では、参加した消費者の 10 人に 7 人が食品中の薬剤耐性菌について懸念があると回答していた。

(2) ドイツにおける動物用医薬品の使用量は、調査が始まった 2011 年の 1,706 トンから、2014 年の 1,238 トンに減少した。肥育豚の抗生物質による治療期間は、2011 年の半期では 1 農場当たり約 5 日であったが、2014 年の半期では 1 農場当たり約 1 日となった。1 年前にドイツ医薬品法が改正され、一定規模以上の畜産農家は抗生物質の使用を報告すること、また同規模の畜産施設と比較して動物用医薬品をより多く使用している施設は、使用量の低減方策を取ることが義務付けられた。

(3) 大腸菌におけるセファロスポリン耐性率は何年も増加傾向にあったが、BfR が 2014 年に行った「全国薬剤耐性モニタリング」では、増加がみられなかった。

(4) ブロイラー肉チェーンにおける、第三世代セファロスポリン等に耐性がある、基質特異性拡張型 β ラクタマーゼ (ESBL)/AmpC 産生菌の分離株の割合は、2013 年の 6.7% から 2014 年は 3.7% に、七面鳥肉チェーンでは 3.2% から 2.6% に、それぞれ低下した。カルバペネム耐性分離株は一株も検出されなかった。

(5) フルオロキノロン耐性率は、数年来高止まりしている。ブロイラー肉チェーンにおける薬剤耐性率は、2013 年の 48.8% から 2014 年の 46.3% に低下したが、七面鳥肉チェーンにおいては、2012 年の 37.4% から、2014 年の 40.6% に増加し、一定の傾向は見られなかった。

(6) ヒトと動物での薬剤耐性に関連する研究によって、ブロイラーでは、親鶏からの伝播が ESBL/AmpC 産生菌に感染する重要な経路であることが示された。また、最新の研究では、生産群に入る ESBL/AmpC 陰性の初生びなが増えたことから、親鶏経由の感染の度合いが低くなっていることが示唆された。現在では、耐性菌は肥育期間中に環境からもたらされている。

(7) 畜舎で検出される耐性菌は、フードチェーンに沿って拡散し、汚染された肉を介して家庭に入り込む可能性がある。

(8) 耐性菌の拡散及びその他の病原体の特性の比較によって、生産動物及び食品由来の ESBL 産生菌が、ヒトの感染につながる可能性が示された。しかし、ヒトにどれくらい畜産由来の菌がいるのかをの定量的に把握することは、まだできない。

http://www.bfr.bund.de/en/press_information/2015/32/use_of_antibiotics_in_agriculture_decreasing_antibiotics_resistance_stagnating-195498.html

2. 「欧州疾病予防管理センター(ECDC)は欧州における薬剤耐性及び抗菌性物質の消費に関する2014年調査データを公表」の概要(Eurosurveillance (Volume 20, Issue 46, 19 November 2015))

(1) 11月18日の第8回欧州抗生物質適正使用啓発の日に関連して、ECDCは欧州薬剤耐性サーベイランスネットワーク(EARS-Net)の年間報告書を公表した。報告書には欧州連合(EU)/欧州経済領域(EEA)29か国の2011～2014年のデータの傾向分析が掲載されている。

(2) 薬剤耐性に関するデータでは、フルオロキノロン、第三世代セファロスポリン、アミノグリコシド、及びこれら三つの抗生物質系統全ての組合せに耐性である肺炎桿菌(*Klebsiella pneumoniae*)分離株の割合が、過去4年間にEU/EEAレベルで著しく増加していた。顕著な増加は*K. pneumoniae*におけるカルバペネム耐性でも観察された。

(3) 大腸菌(*Escherichia coli*)については、第三世代セファロスポリン耐性、そして、フルオロキノロン、第三世代セファロスポリン及びアミノグリコシドの複合耐性がEU/EEAレベルで著しく増加していた。

欧州において、複合耐性の増加及びカルバペネムなどの抗菌性物質の最終ライングループへの耐性が増加していることが大きな懸念及び患者の安全性に対する脅威となっている。

(4) 過去4年間の病院部門の薬剤消費量(1日当たり住民1,000人当たりのDDD(defined daily dose)で表示)は顕著な増加傾向がみられた。この時期、カルバペネムなどの特定の抗生物質系統の消費が、EU/EEAレベル及び数か国において著しく増加していた。抗生物質の大半は病院以外の一次医療(プライマリーケア)で消費されているが、病院における薬剤使用が、医療関連感染に関与している多剤耐性菌の拡散の主な原因となっている。

<http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=21307>

○関連情報(海外)

・欧州委員会(EC)保健衛生・食の安全総局(DG SANTE)、欧州抗生物質適正使用啓発の日(European Antibiotic Awareness Day)開始時のコミッショナーAndriuskaitisの声明を公表

http://ec.europa.eu/dgs/health_food-safety/index_en.htm

・欧州疾病予防管理センター(ECDC)、欧州における薬剤耐性サーベイランス2014年報告書を公表(2015.11.16)

http://ecdc.europa.eu/en/publications/_layouts/forms/Publication_DispForm.aspx?List=4f55ad51-4aed-4d32-b960-af70113dbb90&ID=1400

○関連情報(国内)

・農林水産省 消費安全局

家畜に使用する抗菌性物質について(慎重使用に関する基本的な考え方)

<http://www.maff.go.jp/j/syouan/tikusui/yakuzy/koukinzai.html>

※詳細情報及び他の情報については、食品安全総合情報システム (<http://www.fsc.go.jp/fscis/>) をご覧下さい。